

奥原弘人* マルバノキの分布について

H. OKUHARA* : An occasional note on *Disanthus cercidifolius* MAXIM.

先は私は木曾谷北東隅の塩沢においてマルバノキの新産地を発見し本誌15巻4号にそれを報告させていただいたが、計らずも今回新たに松本平の南隅にも、その群生地を発見したので、それを報告したい。

先の発見地塩沢は木曾川源流の一つで、それより北、又は東は信濃川の流域となり山稜を越えて、その方面までの分布は考えられなかったので、この地が、この種分布の北東限であると信じたのであったが、今年5月27日木曾谷との比較調査のために踏み入った松本平の南隅にマルバノキの大群落を発見して、我が眼を疑うほどに驚いた次第である。

所は木曾山脈（中央アルプス）の北部に源を発して北流し信濃川の支流犀川に合流する奈良井川に東部山地から流入する釜之沢の左岸一帯で北緯36°3′、東経137°54′、海拔850m内外の地点で行政上は長野県塩尻市宗賀区本山地籍である。国鉄中央西線の塩尻駅から南へ二番目の日出塩という小駅で下車し、駅前から国道19号線を北に戻れば約700mで右（東）から出て来る小流が釜之沢である。国道から分れて狭い谷間にはいり、沢沿いの林道を約400mさかのぼれば谷は二つに分れ、本流は左折し、右前方から支流が流れ下って来る。この本支流に狭まれた所からマルバノキは見えはじめる。

沢に沿って支流の方は約50m、本流の方は約800mの間、沢から上約50mの斜面で見られる、手前の300mばかりの間は見事な群落であるが、その奥は点生している。その途中には人工の杉林があって杉が成長したためにマルバノキは絶滅したと思われる所がある。群生地にも杉がマルバノキの間から頭をのぞかせているので、今はマルバノキの方が優勢であるが、杉が成長すれば林の内部のマルバノキは生存が危くなるであろう。この新産地に驚き、続いて周辺の谷々も調べてみたが、この他では見られなかった。

この地は塩沢の群生地からは木曾川と奈良井川との分水嶺（最低地で1200m）を越えて北東約13kmの距離で、これこそ我が国におけるこの種分布の北限であり東限であると信ずるが、特にこの地が信濃川の流域である点に注目したい。現在発表されているマルバノキの産地を全国約に見るに、越前以外は全部太平洋側河川の流域であるが、日本海側河川で九頭竜川より東にある信濃川にも、その流域にこの種の分布が判明した次第である。

マルバノキの分布状態を長野県下において観察するに、この種はコウヤミズキ、シロモジ等とともに県の南西部山地で見られ、特に木曾川より西の山地に多いが、コウヤミズキ、シロモジの分布が分散的であるが連続的な傾向があるのに対し、マルバノキは群生的であるが飛地的である場合が多い。飯田市の風越山にしても木曾の塩沢にしても、又この釜之沢にしても幾つもの山や谷を越えた飛地であり、然も分布の末端でありながら大群落をなしていることは興味深いことである。

然しこの種の産地は狭い谷の谷底か、北向きの斜面、又は（119頁につづく）

*長野県東筑摩郡本郷村大中565

(116 頁よりつゞく) ヒノキ等針葉樹の疎林内であるのが普通である。釜之沢や塩沢では谷底で、然も釜之沢は北向きの斜面である。飯田市の風越山は北向きの山腹であり、ヒノキ林で有名な木曽の小川入国有林ではヒノキの疎林内に見事な群落をなしている。この点からみてマルバノキは陰性種で、長時間に亘って日照を受けるような場所は適地ではないようである。

尚マルバノキは一応暖帯植物の中に入れられているようであるが、塩沢は木曽谷の低山地の中では最も寒いとされている地方にあり、釜之沢もそれより幾分暖いか同程度の所である。木曽谷における垂直的の分布をみるに、南部では 1,200m を越える所まで続き、時には 1,500 m を越える所でも見られる。この事から考えて、この種は寒さには相当強いものと思われる。